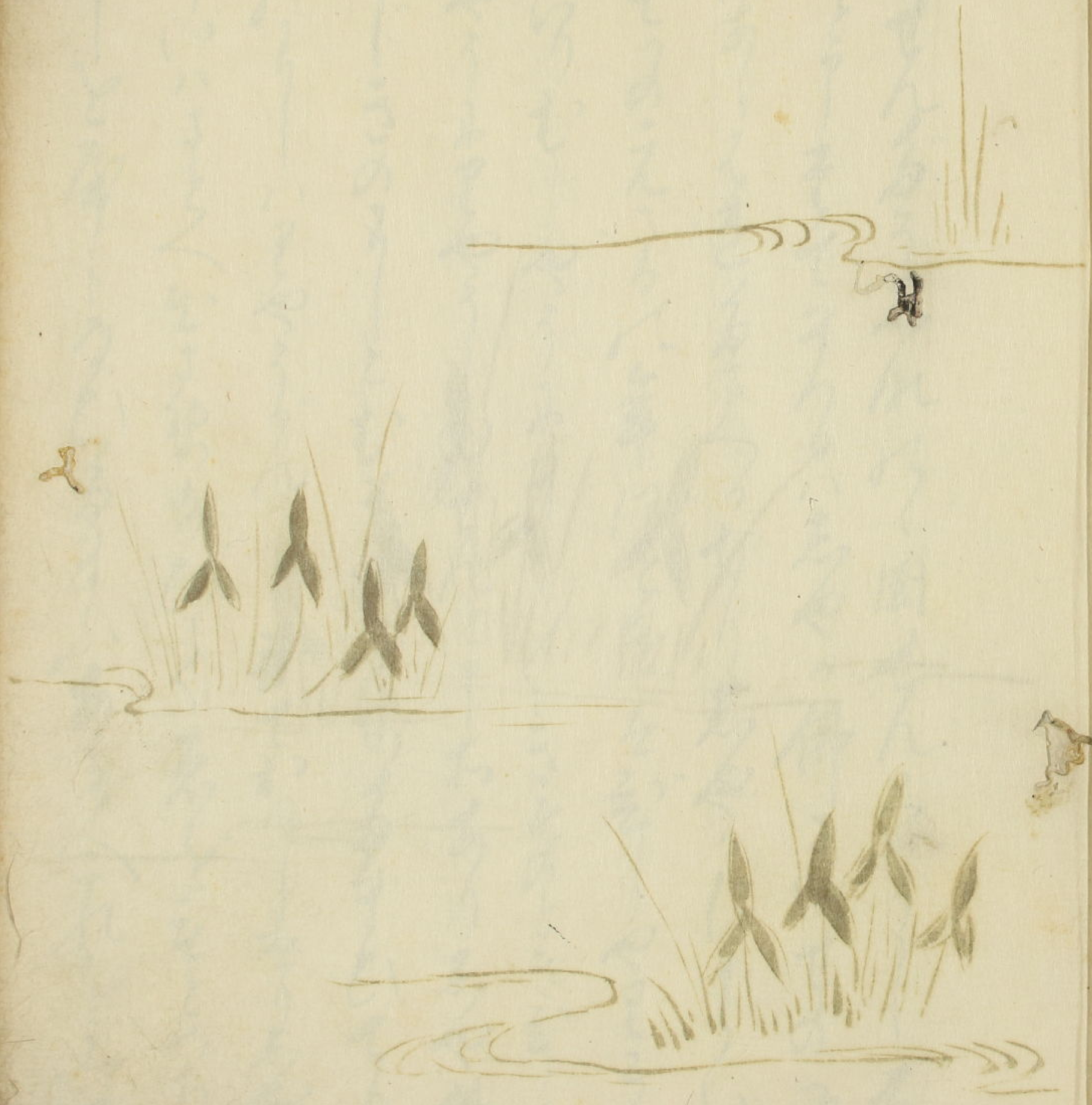
善光寺縁起　三

善光寺

ハ史4
916



門 八 4
號 716
巻

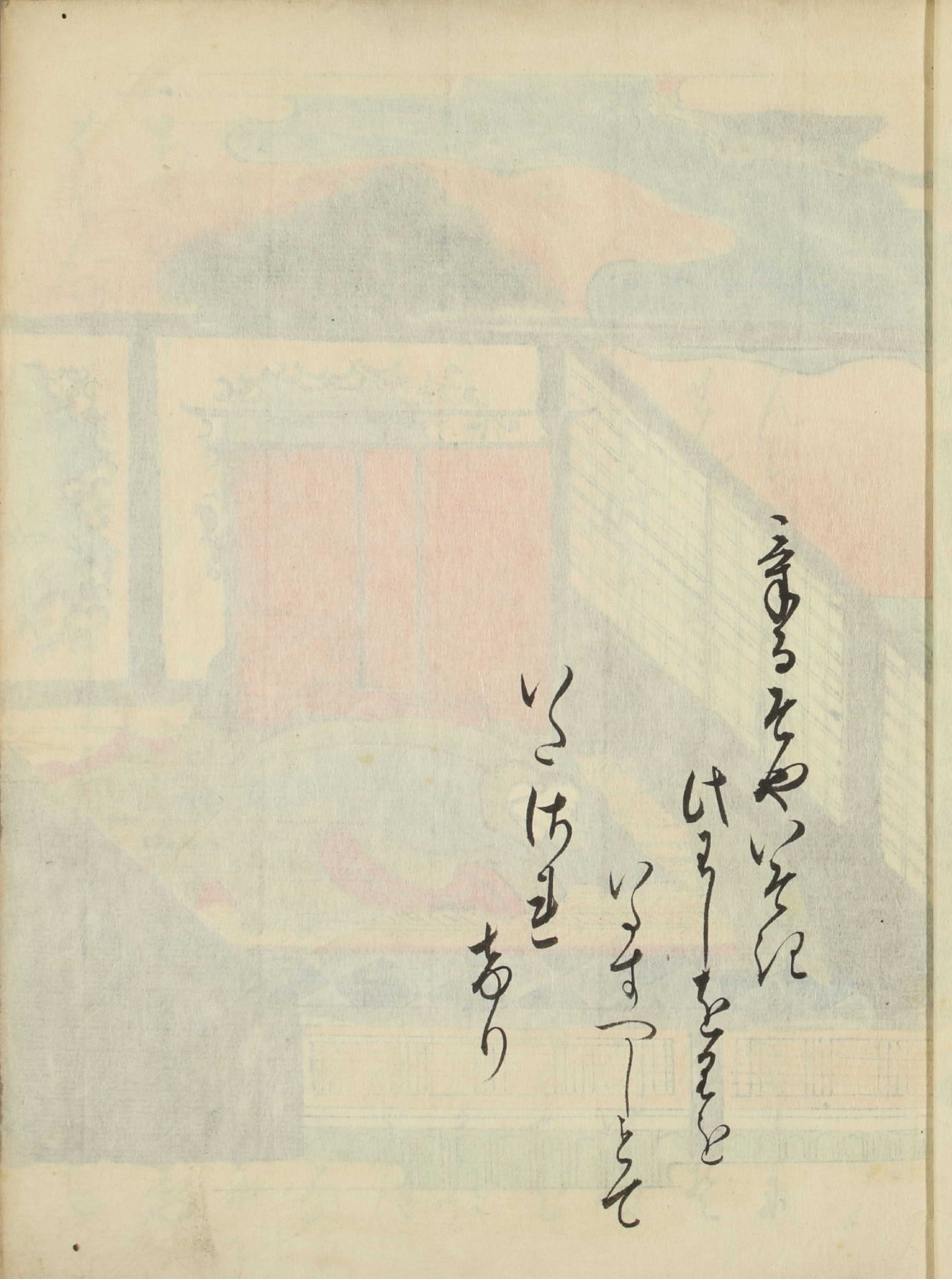
ひやうせんだうらあれはて国せんくわうしあ
如来とかうまでまつるハしやかの佛さいせの
とれあしくゑだうくつなりしやかにましい
六十七のえさうれ年月ともとをぢしやまこく
のたりむじやうみまし　くさそのときをしや
まかやうみまやうじのせんとやまありしやか佛
こんじきのはしとむまれきかんだうきひてあり
ちくれうしハまやうげんし　えてかりしかりしやうの
小まうハまく人生まれのひらくあんとそとあちく
れうしと申しうちたうまふあるへこれをとみて

これみつはうかゞひしはかせにてみなみへまゐるいかに
そうしてかのちしをとりて国のあるじに乗せ
まずてんりふだんにあるものとかふひくかの
ちしの兵乗て羽をとまりて取り年をとめく
弱し出るかたきは色にいって稚子そえらる王
しを藤むかこ舟つきとろけ式いまいり
てのち七日みかいてまつしとふ高うる店んありまれとし
あるとれいして雅ゑまひく国王の宣旨に
はしめそてまゐるよきみとこれを志らんありて
ますとにう川く申すよもしうりとて為りを思い

こあそのふしとせんしわこすの稚宮れん免ん
まんとをけらしみをとおこみるみなそときこ
これをなきよくみてとみそうしやまれそ
ゆらしをえまて志んのとといてもとをあ給
めみしなをよそましして七日まうりぬそは
御ますいれあるゆへんとおけまそ

みとゆるしけれ　それよりしとみはほんさい中
のまうなり為ものゝみあす、いさま備のふ為い
らんせんと加ふ庭らんとおほせ一度ありて
かり乃秋為すひくかうし出羽くもちきたちよくち
やうあまけれは、いさなんちうふとてあをとをま
ぬそれらうとさらふ庭らんとおもひ志んりみかい
まれとをさしなきいはまれまかいめんせんとおも
ふとお出羽守これそのとれよし　みかと
むかしくろき紙かし　ねうりそのよの常ふ
まれゆかしくへとさらふにあつまそのみ方に参る

子なれのなけよありて志をとゝめまほしとやまれん
こくまうさこつかし何事をかふとせ
んしありけるにちくまてびもしまゐらせん
あけて見給へきありかうしとふ事をはしめ給ふあ
はこまれさとく申しく見とも見ちかひしをとそ
こゝろこすの事ふ七日まてなりまこあしまいらへ
母のなこころにかまん今とこれをうけさかゐみあ
ふえぬ見をといいてゆらかく我とやまれハみゐ
ときこうしかときやうれ事をとえなきく
見けるをまるかほ我れるつことをほかり



ことるそやいそれ
けふしをとゝと
いよすつしとて
いくはまし
あり

偖それなんちゆきてはゝとちかねらしに
あるへきとせんしありていかんしよるとを
ちるへうひけるはらしまゐらせてとひゆくみへ
とらりんみんをめしてはらしおちはやく出を
まいりかみてまいらせよとおほせくたされけれは
人々はとりをみうしなひとけりゆくかたは
みえさりけるをとひさりてけるかみやまとに
ゆきまゐり大和のくにすいこ天皇の御中に
ちくのうしは○をあまてうへしやうき
くそんかんしてあけ候まてふくのゝよりなし

されともちからなくてかみしをさしてとらせ
たまふ。くわんおんのちからかかりなくみことにけす
そうのなかけるそ君は我つかうしてあさまし
きのれまるはわほさなるつまをつかりける
そやかるはそきさすてそとおやれおかんとふかく
かなしむにしてかんくわんりのうまつ老
れあそれ志けしんとてそれよりまいすちうの
山に志うよまをつくはくまいりとせん
しありてのちにそ志つけるそれち
志やかよくは二十九祖となりてそなんさなう

くきやうしくこまひけ山にてちしの子にむまれ
ちくれはうのくりてうく志ゆみなまひられんとて
けふにそおうをとらはなましいちくゐかとんとふ
してちとをそて五十年ついにすみなまくて
十二ぐしやうどのほさ何そまてれいうしく
まりなまふさるおとみやしや里國の本とう
五百里かれくるすみさんく七はうをつらく
まりしやそんとくきやうしうそまわりその
やよくまいりくは長しやといふりのあり十万
れそのかしとむまれたまをとこしぬたやう

しやを五百人はうし奉りそれはうのまんだらん。
かすをしすゑとおきれはもとより長しやれ
家まてハ七日のみちなりけり掟を五百里なり
れなりふみ多かりしをつこてほとけをふみへ廻らし
まいし奉り七日のみちとハ志ろしよまいり
かりちかよりいらし殊のほかにいつるらしれを
まうれ御さんまいれとよハ志んじう経いて
んしやりなをりいい長しやれはまいりのとれ
多ふるあみをるはらみなきはる経うんなし
おのくふしんをなしてこのむほとはとまよ

まうし候まへそほとけをこそうしめしされんなど
くいとやハ今までハかうおかうおきられや
身乃まうしき奉人にてまいり家のたてまつ
あさゆふの奉りをとうみ多つるはさしそうされ
とをちく子みかうしくとつらあさ候れ孫
うけうせりゆへはかるいらしきあかれ妹とハ
むすまうりむりしをほとをすまれ世をおやす
たろまいつ奉なりれとかとをとれ多つる
らかんてちこれをうきたりまてにちく母
れおんなうしてとなりしかうほとおゆめし

今まゐりは
長じや
まいりあまつて
みなくらや
まい勢
あまふ

さいみ長しやの女ばうてんぢくまでかくれなき
びしんなりしかれともかくごの御まんとんなる
事人にすくれたるしつくそんはさいちうよは
まんどんにひかれて長しやもちつくおかん
年をかさねて十六人のひめなりともかねてかね
えたとめでせうくそうじ川のい長しやれのこのかとり
みゆきそなたは又そをはんちようをそてかくし
すすめそれをこえんとしてはひめうたかたへ
とかはせありて経うんうちをまいまち一人つく
そうじ川のいれのこのかとりまちうつをくやうと
う御まんとすゝめあまくだりてはおもしろくあそう
さかへてとはそちむかしくつまうしつ せん
うくり御まんひくいつますゝめゆへととすかんう
我女たうしてそびとふしまで御まんひけまで志やく
そんまれそしてすめうくれとお目めしまや
志田せんより心くつし勢御まんひそうじ川のかまたへ
ゆつまあり御まんとそうじ川のいゝさいちいはすと
きまつてましてやらんまやうし◎せんよりも志やく
そんのはらくりとさくかとみかとをと入かそまつ
まてハいつまかしむとをわのまかしをえこいまし

てんかのはつとゝおもひ御めんなくしてほとまを
いまゝてまちくらし候へともむなしくかうつ
あまりくやうして志ゆせんなきをとまり
いかりし人なきを御ゆるしけまへ太郎きさ
志んとうりの家にみなれいつく十七もんか
あいまくもやうとなりくところを年十
なかく七万二千人かけにて九おくれいまの
人ともにくやみなすきて勢まあまりそれおり
まくらいさいあひの志とりむきをえありすと
をあはせといふてんちくにうらひなきをし

んなまをしやうまおうれもの志れさきて年
まてまつくせのふたなましもんしをかう
かりてみしさのまちやうちゑい梅かうけ
くりしきまうのゑきまていて七年れをりよる
かのよ勢十三のとしのさびやうよおかのさ
まへくついらしきかとはやるりしらくも垂
ますこまをあつよちえしをみくまりうみそ
てあふこさ使く志るのるかうく筆しきゐを
しみしすかこみとかえり字りそのと紀ち字
んとんのそくまてうみゐへつちてなきさか

なしむ事のおもきハしゆみせをはやくまなふ
そのうへかうしこんでんにまいりけれはたからともに
ハおゞりごうかきりありて志くしるものゝうみ
をふみそくまんつらひハまみへつりそん座る
なきまれともはひめハきあさくをみるを
ちゆうこうかりとてすくみかへりかんとまた
いのちハ長しやかほうこそなけれハこそうまも
くれあまふる信をハかへしつきんなし
十まんのあかしもとこれまでつらへまゐらせ一
人まんをとあまへとも十まん百まんのかなを

うまるとてもちやうこうかきりあるにとなきを
そなるのくかしらうかれはふかきうとをとはせを
よりはかのみあまをきまいるふ人事人あるまじと
十悪れをそのかりかなる八きいちよくそじ
わの念んとんをういのちの女人なりくあそなを
まてまつりそかつそけのむまのかるいさみ
いふてかるをまいつとしされけることはこそれ
いろくおんぬそあひ座いかるかつてろは
かへはとをハ志ひかちかうしてはしゆしやうを子
みなみしておもはしみめるそそかうのとあまかを

中将とてハそれまでなりしかバせんかたなし
御ところさまへ参りしかバ中将にハ郡や
思召しやうハみやこにハ世にかくれなく人の
ようなるハ中将ハ一人をしりやうにあらんハ
あはれ一人のむすめにこそやうハおもひしれぎ
そのこゝろをかれんをすてまいらせおもつたん
ごきなりくびあはれなるけのみ志やうにさる
つくハまことをまうしはやくとみさいをとな
けてうけ玉りほとをまうしあけまいらせ
かなしみはまつらんてんのおほせに十人か

人の子をもちしをハ一人まてそなたハなけれハ
かなしみかぎりなしなんぢか子をとおもふまくつまて
志ろしめすと一子のさいとくかりへともなんぢか
むすめのやすいハゆうちかしめをとるひとし
とおもひ参けりまてんなかりかハおなじよかなけき
ほとなとさみしきをまちかくなるはちかくなし
あはれにかんしやかいのちをめしませさいまき
まゐらすとかけきけりまてほとなきまをにあらそ
くわんなりかくりくましの方ハ家の
まうしとてりほくなをとまりけりかうこととを

むさしのとましへむつかせ給んぶ川とやまされて
きいてさらくすをあまたぶ川さる行ひ
ふしまちたてまつるあまたをありけまんく
川いよろこひ入りくはるものたし其を
くたころもまのまんにんみな律ね
かきみのはなをさしぬかれむさしのふけさ
ま三人のものとみなしにむつかしく給んぶ川
とそへきるそのほかの人々をたす
まして給んぶ川やしなまるとみまいらく
よりあまたぶ川いきかいの家よりいちを

てらうちにまいるを十方みたのおほせ人たち
こもりまゐんみなほうをとうけるちかく
よおほしてまかせをとうちすてかつりまゐれ
おもしろきまんにこそとゆていれちとさ川きく
すちくるもまでとよろこひけるものか川ありゐん
まきをほしおそまつる御人々み年中をとを
くるかりとまるのうちいでき御く
家くまいる

長しやいそきまいりしゆせんにまいりかゝく
とちみはきゝやけるはほとけのおしへの
おろくおこなひゆへてあらちまちわにはせさや
うらんとせぬのまことそのうへまこと日ころ志つる
人つくこれしくそせいしていのりくりかへすかな
なとありかたき次第ハかりなしあふきわかつく
ハいのみそなしてまいらせれみほとけをぬすることと
うつしまいらせのちれ世をいのりまいらせ
れ志ゆしやうなをそのまゝをやすさんとなむあみた
まそほとけをあつらへしそれハさるをおまれた

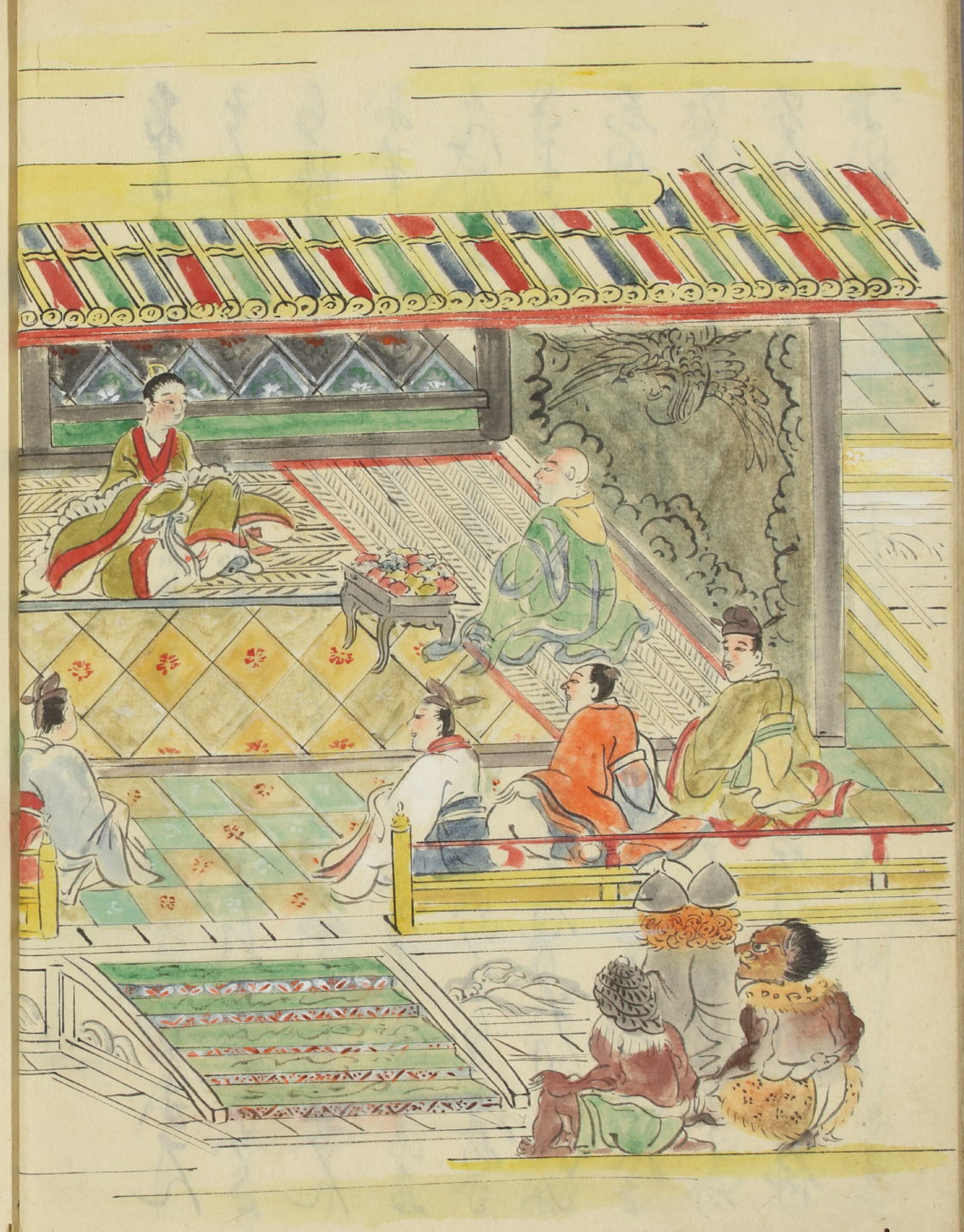
伴ひしてまいりにけりしそまつるへきさうの花を見を
れ郷せい乃あかよの上十三ねんおくりうつ志や
なりいくらふ道よとおほせ事れもちやう
しやうきやうはこの㊀是十三ねんにてよみち
くられいやうみをいうしまいりしせんと
申事れんかねまうすもちくるこの㊀まて八百れ
ふましさあり申まうれあらしきのまん申さい
れこの㊀をも引ていうしてしそ末代の恵の志
やうをそうすをあやりんすまてをおほせ事れん
それ是さなりみとしてうつ㊀はりんとやまうと

みなんち三年をみとんあり候しをその二の㊀
をこゑくとくせんとく志んつう第一のりやう
んとめし夕を川かい長しやうしよ大公もん
をおほしうをいそれまうしやうみへりて
忽んぶつさんとを子六百年ゆうかでこさうり
あまり／＼とおそかけまへりくまいんそんやうを
まをりうへ志あせんとくうりけるうれる
大くいをもうりあまいみ志つむのあしまいる
みいりて門をあらうみへうき弥へりうちあ
まかりまのそや仏りんとうつこ／＼こさりのこそ

おほくねうのれめよりくりくあすげしなどのえ
なくらさとはふめのいてめりくまんとは川て
御義らそんと出されとをあすてうらあるよしや
うまうみやまとひめりくまんハいけ川をるをくす
まらひとのろく大いひとう人川しあまひしくや
うみほされくまうくりしやあしいはますりて
いうすかせしとてまうまうみやまされとまうく
まうまうしめしけらそのくまん八をよえしやう
しそこいのまてて志川をしやうえんれきき
ゑしらとさてある志んてんすてあいめん

当日まうまうのてれるはそうとしのまん
そんしやいりれる志さいありてこれまてらき
ら勢あすふをといてもれハまあしのせん
みますまたまして志あくそんれのつひつりを世の為
んにれ今判ハ長しやさいかるくらひあと
ごまうしをとうしてのくそてまつりまいり
志也しやうとうすきんとし世ををよのつれこ
のそてハうあるとゑんぶハうんまていそてまつ
見くすや志られ千五百あ人会しこれを佛
よまいらせ以へとしうまくえ

まうしいつく返しのことをやますますさては れ
しらけるとおほしめしける折ふしまうし
まうのむさしはかさいのまうしみまれけるを召
こゝろほとまれのちるあしんといひておほしと
やつよいけむらきてもとやしきれとまうしさう
むまやのいさあまりて遠さうのおかしなき
ともとて志ろうそれからのちよりこんまん
さいれいうちせんるこそとそ五百里ゆうとり
いまやそのくさんこれとりて里ゆう志ゆせん
まんりほとさまうしてまわりのふれとちゆう



しやみあまたくはこう〇りそいまいらせ候とあり
けまそ長じやうきてかりいわらしてこく
らくれみかとおもとかもまいりせんれきうかうい
なみとうし山へさとや一家れをまをにそれを
またあまん仏しそかうたしさくさそりとあま
こあ川めせんじてそれれて方とこさなあきさ
まれをうをてそのうへまゐしてみりにむかひ
極ん永川せそこうらくれほとを七十まんおく
是力をつわつて人志田そんまいりあまひ一白
なんちまおうまれあまふ入をはさまひけまそ

長じやまろこびかへりくいりじと今今
て申く絵をおしらくはさえ成なさせんその
申やまち一人まこそ〇すまるつくあまた家れ
けじまつこびはさみをあまと長じやおさきの
秋しへのおもく方をこさまおあうまおんかと七重
みうなそれうへまゐしにしかむかひ極ん永川
申まれてもくらくのあきこう川一天志田そ今
家へしさの霊まのりてやうつうすまい
あまふ長じやをたしの家れうちれのり能をと
くうし当うくそくらくのほとをとかうさうて

まつる年をかんがいそなへをめくしける長者や
そなへとをおさめくざ紙にしくはさうかう
をうけまいらせをいさみけるそのとれに三年志
のせんなを、いかんりくまんくつり多まひまた
ゑんさせの人にのつと〇をなくらへいり
五十人なくらと御さ宇れん聖のつくり佛弥を
なりのひさつくらくれ佛まそ徳つしもなひ
なりにをつくらの名をと尼ありくいてなすむ
て長しやれまへ不二川せんとまつてはむひりそえ
なちなまへにつくられかときとを意りをはへ

まゐのひける花寺国のみんこんこれをわ
みる御花くりょてかうまれくふ川つくつかみにて
すまりの年のりしまさて佛にくらくへのなしせき
まふをまれちのほとをとりに東みいれて
ちくへのつ帝なまふ長しやうけそけるは
られに後かとの大なんおつしつるうひけすく
まつく雅くへのつ奉行て いりましてゆちの世を
なをそうりまいてい花寺のしやうとをもみち意せ
わさんとひてほとをれくさまつくおくられ佛を
をわかりまいらせく房りくのつるへきことて杯を

あはれあるにちからなくみしよりゆきなすましく
たゞ人とそのまゝ長しやれけまへみちてゆきひ
さいかせんとぶしなすへとりいたまへ給かうと
さそまうすていぶれとりゐうとつくりあん
ぢしなてまつりんとおもひけるにこれかとれ郷
仏をよのつ〇ぬさいのくしていうなふまし志やく
せんまんとは本ハ大百里まそをかうぐしさ
なむあさいれ人これに座してありとあかつしうて
よそしやまこてれみとりしれくとうかしやく
せんさんれ人命ーなかてまりこうれ人志なるう

せんとおもひけるこれほとの大事れ本をといの
てちんなうやつまりの御ちへ志まうじ仏事
仏本をこれ人命をあんしすゝあうてしなを
なりをとはれ守るはいちすいこ〇との人
すいめはこきんつくれいさごとすれてそいうは
こまんくそて八つまりとみのふつをみをと志言
じなてまつるみとこきうしの座そそ長者
れまくきやうくれるくさやうそんじやく人
まれをしくと四とこそある長しやうすのめ中
まつこひいきやしくとまちなる

みかとはめんよりわるすと里わらんするみ
うれしさかきりなくりんのまへにこう○これ
やうとめちてわたりみちいれるりのそのま
わろう○あまた長しやうきみとしめしてそ
まつりんとてきんくれいさてをとまれたれた
まをとそさいとう一字れそうはめこう○とまく
ほとの長しやうてありきさまとありかたくた
わしめうとうちへいりくわらんすまいらうと
うれしさかきりなくいて志ろう○のおもう
きよてこう○のいさことをそれわたりみこと

かんしくさうめんはありける女房をひきさ
ハまさりてみえ給へんなんちハ長しやれ
うれしそハいかにとのゝめのをとゝめまくへて下女
そはにをやしけるけちようすめそかゝるすの
たかれをたちらくあるまのいかにとの川し
うんとおほしめしかんてんとやらんすれを
ちんそうんはあまのうんさしうきよる女かん
うらひめうり長しやうまいちのはしまさを
七重にまそてあまのふりして十へつてすへとき
こまんしくれハとよまさせて國王の宣んさ

んは笙てんとすみうとこれとやらんてこれ
あまあま天人の御くまりあまふのとおほ
しける長しやうさいらよみをとみうそてま
つりくなさうをそうくとうりしけるみを
これとやらんていかなんちハまうとこく
なくそとおほ御けまそまんは君とそうしめ
やまとのへてあまこは御あまへて家の内ち
み宣あうりみちくてけむくやらみうと
さうしかしそれハいかまとせんしあるまれを
十せんのくらみ年むにまにませあまへとと

まるのとりし大みすみすゑあふすふかくりちろう
ゑそらい忍もはするひかるあまそともちてゆへそ
いさつとりけし大とりに筆ゆつをとやす
みなときうしめし十せんれんにおよむまこあ
まことをしるしかうハ長しやまとふりあまに
はしめしにしるしまりかりてゆきあまひなん
てんつらせのへくいらしきハこふりぬ大いちくす
おハ言ことにそくちとあさそてみとさりむく
そみとさりそよ長じやハまるといけり
てあやまんとするそとありまれそ長しや

やまるはなりまのふそくありてみとさとあや
まちまてまろん君わらうらうとありうこ
きさ筆にをのとひかりくれこさり招をして君
をなくさあをてすうんうあふゆかりとのり
てりすきこのへこきんくまてハ言ことみつ
こさまりこ樣くにらんゆつそてうけらくさあ
まとそりあかし大川ハけりつしけまゑ花きう
へちりけるとありらんていしみくととりかとし
うくらくせいそうくかことそかはなける

くさみり夫しやう人そこうくわんしゆまふ
長しやまきりハ吉徳はうらくし給ひけり
とうりしやへく川くみちくて持仏ゐませそ
宝寺まてつき年修しちそて次第をとりて
ましきのれさみのふみすへそそまつり十まんの
らうを動しう秘せふくひうちよなかしとどり
けうしみちとの紙まへみつくそよみくさやう夫
しやう人みこそかきう申物とまいりせ宝利
みとゆうんしてさいとうそれうりはそるしめ
れらんりける長しやかきいちよこうろみかり

され長しやをめして帝かのまうにきさ
てりのせんとねのりうんちゝきいちよをとまい
らせよとせんしありけれは長しやうけんさ
よおもひけるに志らくありくやまうかたちく
ちやうとそむくにおそれてとそれ人のつ
経はさいぢよみすれる年ゆつまをたとい
すまんれくのゝかくとこしくをめさうとをそ
おしこまそまうるまもさいちよはいりくとやあ
くれえまをにゆところを前むかりさうえ
うんちのかうちみかうりくしき女をうをとすへ

くりてまいりせまをせんじあまたは長しや
うきとこなり寧ちみいりくみめよれ女かう
をとすへすくりなりうりをうてつはとみいそて
勢みをとれめまくよいりしけまそみをむらん
してゆる且紙をうくしとてかめりまですなら
みをぬきりてろみうりけるとて人へえひこし
こまちれよそうへてちかんこまうれるけ女うこと
やいかちうきとれよりちくそらすれをされ方
まつ皇かうりけるにあるとれて女らしゆ
せんくまいりしみめせ川かりつみおやまなう

慶うするんへはせちんまんくわれねかしとなる
よしせ川かうあら紙よくちゆうのへして我
いとをけなよりちくゑうにをそれはふだされ
みうじとをせさとなをよけるかうけ家
日うこうとそりおとしまつしれあらいま志家し
まやう志ゆせんへまいり志ゆくてそんなしその
たとくりをとやあきかやれけらやうしてその
わいは長しやみ身をとまうせて仕人へけるかわ
くの女房は中よ一人へえらひはそれてこまち紀の
んてみなしなもしのしそめそしけま

かれこまきにてまうし志ゆせんへはまいりあて
んとのあまへみかとい此こまき紀みかくことあさる
えらのまいらくお仏しめしのおとをすけ里
家う志ゆせんみまいりあまふかま婦し長
しやそをまいりあてい従しそ上れはおてな
まこを志ゆくせんあんをやうあんとおもいみ
とをみむかい太平れのそまてはつとを志ゆく
そんれは手まりゑんふへこんをしまいり
おくらくれあまさ仏をとうしとくめいかさ
うをつくまあんちせんとそんしいへまし

まのつまれさいのくまそハかなはまじ君の
こゝろの在中はまうへすゆへなまふ志申せん
さんとなるや五百両まつてこそ行かり
ゆへかしとや言まちたんみとて川とはかせん
とあんちせんとそうしたましそれしやせん
されハ屋敷事とはすへしとて家へり
あまふそおくちみと長しやれまくへつかひと
こそまゐあまひその方せんとまかかさ
へもうしまいしをよいまゐらすつをつゝ判
あんぢせんとかほせくさまれ言ませは長

しやうきてさまかりきれいのちとすてあい
くわんとおふし志申しやうとくあまて言んぬ
なまでそいつみとみそてまつてハわか称かい
むかしくわん事にそめにもれあまいな
そめさもいとそかとをそを書てまいりのかな
ふかしとや言れんみとこさうしめしかて
んれあさまるうしもくめいとそむく
事よそさんくさいるれ長屋のそ大志んへまやう
とめして長しやつめいとく小へしとせんじ
あまそにさまれこれとさうしめし今ゝ千

ゐるこそ長じやれなるまをかりいは長じやうき
めにあひなりていひせんとうけさなまいふ長じや
をさかれとこそていふそれほどなりもせんかまり
はなしとなけれ申すれんかたをこそこし
けまたにこれハ太郎なりおうる人くまた人
してあんちせまとのあまへてみるとそ長
しやそかたきのとくし不まうしとて
太まうれうんじやう千人こきされなんし
やうし人らしやの入りやう千人二千人れんなん
しやうとあり川めく二とせまつくり大まん

ぶやうじ局とかくとうちまんくと
ぶ重けるうれ
なりりと
うそ
かりうはなりとのく
まてとみ
いりんしくとそ
のろく
二年まし

さてにはしいをうりしまてまつりける宝を
はしらのみちにこそのうくてハかりかたかりし
いそきつきのすみやしむしやうかんとりふ
まくをとりてしやくきのはしらのをとしちやう
みしやくみみちふそてまこりまいてんとふへとり
といふかみをとみつきをその宝すれとりを
まそいりあひとあつまりかみのとろく
はしれまくさにあしきとさよふのやましやう
ちしやうめりかうしやうめりめりいつやくめり
いらくと成ていまる山のをとこうく人志んく

とかこますといふ事なしさてなまじいにたむけを
めのまへにせうじんおこなふ人は十万億
くうそかしこきとて里なう志田せんれんかなを
みせてまわりまいみすきつる事なし
とてなうもんとおもう一日へんしをほとけの
ねそぐとそうれなしして百千年ねまいを
なもちら事りまてましいふてんちくまておく
くれ志田しやうとするに事をまいくそくさい
志く志んまれのふかくこつみおもいとなる
まてなまひけまてけんまのかんこんとされ

それのくたされとまこつみすをありてされは
まへんみあう須ちんちくまて名利い長しや
く魔うちしかとをなまけんまのりんこんと
さいどせんなめみこそつるなりおそるゝ事なり
穢土のへまひけまてさてハ名利ときゆるのな
まてほとけをしやうしへうそてまいり福
なうちをつゝりにまいいをたのみ志りてまする
ありくれうや名利ハ長者ハろくさい
ふくのせいかいまうとむすまこかとをみつゝく
云まふされとなりますいかほ惣けなてん

ちくまそハ長者とむすまれけり此人ふれぬ姉
とむすまれける年月ありかくて後よこれなる日
かんなしてみたりける申しやうとおほくへ
しとあり年れてせいめいたうふしまうひ
てりまこすそに二世まてむすまじあひたるの
姉のむこきとんまいらせたるにハそんめ
いのちハ此国よりまいりしくてまいる申しやうを
まいりたまへとありたまへそまうい方月御
けるハまれ日かんなるうりなんちとまいらせまし
けりくさきとんれくちすつきとありたまへとけハ

ふ⊙をとまうい(せ)させんとて五りうれたる⊙
をつくりあやめしさのはをうきてすい去申う
んとりみけるまてこれニまいりしをあいそ
へ五百んのみ御紙あへれたへさいこうれ
みんこんニハいるしてまいりしを又にまいりあ
ひさてまいらんとうけふうしむてゑてん
み二申まてかひらしくてにまいらせ⊙
ハいかにえさるの年十月三日みなんそのう
らみはく此まし多いりくそうりん十冬さ
やうせん是ありくうる日ふし二三日の

むかしことさくかまひ侍しもとゝて此所◯すわし
あきらてまつてかよふあらしとその世いせい
まうれ鄭書をとらそまつり太師んをあふる
それみをうかりぬうじとうて鑑を我うしめす
まさんらくまをなくさいなくれあまさまをと
あそらし室さんてハう川とれ此筆ありとて
李白をえらひてあかり人うそてよりう人ゝよし
ちんしありて席りそにまくしとあかりそう
つゆきるうくてみとい以◯うち川うす
くけるさそひら川ちんまうれらくおふつ

勢あまふさかてさびしん秋ましくけるか
かう鳥う川とよにすいをさあしやうみきち
忘んきせんとて上下ちんらんまりてかむ
へぶよし筆しませあまくありかうれさう
いそまれをしくとまりうこせなうをと
いあるみみなくさよ山さんしやうし由せきそ
とい筆なりそあちお木すの◯ん秋紀川天
まうほうさよう様筆まふゆうめい天まうれ
そうねよそあり所まひ以よしくましい
とふ川とひあまひ筆まり此とれい此筆

よのまなかれはきえひありけりちかゝては
らん覧せしみれ火れあかゝりて人かほくお
ろひ帝りくるゝゆうせんきありてこれらこ
とふありときいのん記へしかんゆうれうを
とめせとあかりりやすゝみいてやまかは座
ちのまさいしてなりけりくすはみゆとゝとぞ御
神とあらわかしつぶやきにりくる高りしこゝの加と
きをもうりゆうりしるくゆへありとてらん
まんとめしこれをかんびの加こ子中ゑ胴そ
くれをおかれ歌帝りくるんまんちりかまへ

次かほ響けまくらいなんぞのかきにます
てあてまつるかとをハすてちましあまいな
こみ柳りまいくかかし帝の記りりく座
くとしてみえまるすへはる経人とをおし
きまにれとひけさまにも猪ハるしさかりけれ
なかりのそ記よあきんとて本すめんあを
とかうて記ぶけまんこう◯れかとをまて
そかりしけるゝなこひてけの加ときゝめせん
いれあんちせんとそあらそひける

その秋の比あみまれハなんちらふあんち
せらるゝほとけをまたくもとみつけそのよふね
ふりかゝりまれみちそうとりしまれちゝてハ
たとえすこしさとまていもとうかりけり極め
まなそかよ人のみのとこそかのくりやうれ比あ
とみなるましくかりけまそまれとそまゐりふ
みなるくといひくかそれけるかくてけま
あなそいかれるうきさめみあそとらんみるとく
そうのんかさんとく信のそかまんてとうふ
おこうのんかけまそみかともうつりされて

しそかゝるつかひとよふかたときをゑなりけりまいさ
らひあまたとてかゝるやうすてなてまゐる事
ぬあさましけふとて今さらやうにおもひはつを
てえさらしいまくおもふあるとはのりや
まいりくやうあしたかときをすてなては
つりてゆくえいまし伊勢おもふいまつり
けふとてかちよりしてはかときを大れ中に
いまてく厳さん川せをかけまいかちとをつゝ参
ふかひりめ我かさとふそすことをつんてかとけ
を中よりまいく七日七夜厳さけまいとそな

をひりとえなしおまひく二川せん坐
してましす勢んかちとをかそれくのを
やみりくつ年とやし年まてえ念やすんぬのを
やさくて伝えうちくをとりひあまて大
ぬ中まをとりけいしきのう人に大き
なるらう◯のはちとおもくさんくようち
みけまえうちのきを用これんをまいくせ
んふをみつをぬとまめしてちとそれ年を
ぬをやこれとみてけにかそうき半の那
厳くぬをやまとをくゝぬをそてけをしとせ

志ゆりまていさまにあれそまゐんれりの
ひゐまの人々〇とりかへまんなに
こさらされけるし
加ろゐ殿りのは
すてまとて
なんえのうみに
すてまて
まつる

はくにまいりみれは中みすそらまさしき給ふ
なまめかしく月日をおくり給ふなりやかてかく
こきやうにはまかりてさやうにとらくなし
れなくて少将なまめいてる四つのまとりもなく
少将はらふ二大ちうしやうをさんしやうさせ
けふははなをしかゝしめされけれはとかくそ
またやらせんめいのうちよりけう四川かうとまいる
わかみのなりゆくうしろをとほかりて大給や
ほくしゆしゆうをさまたせんと心かしく宗
へちよらしとこそらんせんとゆくは

さ様けるにかのくにゝも伊勢にあるなひ
しかはしけるにそれるうくていかゝすへし
とありけれはかりかしこの四の宮ゆき四川あ
しれよろこひをなしてよろこひむまやには津なき
てこしとをかんとするにはつかくへをそ
すせまてあそひかしりはれていろかしにつかき
ところをなにしゆらんしてうんらみ給ふ
ありまれかのむかしあくこゝやまれなりやとか
わはさんらんもちくしやうなうと出くうく
ふりなかうちしゆんと宰ちえんませしまへし

武さしとつみをとられてかゝることをうしける
屋のうちにまうでまんれらうをとり歌なまむく一
まうとけふに〇ありと三川つきのとりつゝせけりの
三川ほうきりまうしにらうとりきれとて一へん
とすめす歌なまへてちうみありてとひゆ
我けるなをんしあひうみするのなふらしれ
うけみけうりぬさてハけうかんいうり川むへこきと
ことつてせなまひくかうちのらみあつかう
わうまそゆせひをとそうへさせなまふありやひ
まいほとへこうかとろよきのゑ。やうてかなし人

みけし川といふわみしやうをとかしらへなる
なけしハこそめく志ひもとしまねとて河
うこしよけ〇と七重よつきこれますを矢と
けそぞ駒なるしとをちりてまちの色を
なりほとれくなりしのりやうじやうみなし
よ勢なまひくゆうんしけまてけうしき
け〇をつこへさまくほまりのことをけ〇み
やとけうの年なかれうそくけ〇をけなむ
しほときの田志めりとうかそ志めしやうれ
けれうとはうせんゆふけ〇とハなすせのふ

なをしく思ひやりして思ふよしある事を
しらぬからもみをましてきんくにりこを
けるこれとかそれて勢てれつかりのかはまし
うち給ふりしくまでちりきる二と親かあ
ひさのうちひみ津なるになりしうちまをうま
ひくなく一度よなり勝なまふありやの津
とりのありれとこて川きとりうそてつんとて
大せんうち川て出でりなりしいらなこままめ
しておらゆかせなまひけるかあるむしや一度
おいつ度まてでつりすてみにあるやうをみえ

なまふ本千なりしきんちうにちなひな
まふまれこのなひかんりとうりありやとう
わう川かうと部なかえ出川にてんとうじと
なてこんうつまらしれ二とうしときんくを
めつらくりそてまつり十とこさ様んしなまくえ
日こるありとを見らぬ本にかはこされるむく
れ本一かんかい出かりあ中しこれんしきれそ
本のう川るありしせらられてみえをおか
しかにむまみありかまう川かの中へ入
なまへえ此本屋んしうちにみちあひて

なのしとゝめしなそろへるくこそはなのしと
みうしなひまゐらせしくこれまてはみかたいつく
甲斐勢なしふそとて木のまよりとみゐたり
てりしあんつゝみて竹木の中へかくれのふ
まいとさんくみかとうちてそつくりける

そのちゝの御はゝのかたへくにまいらせさせ給
ひ御いしれぬなまひけるはこれハたゝ事
にそうかんれいなるひとゝてのむと三
と経しなまひける事にて程なくて
あれ〻御いしハこゝろこゝろの内かしこなまひける
みちれなとに侍うしうまうひるむや あ
まゐまいりあひおのゝくかなとゝ婦よもてなし
こそて御いしまやけるはいかにかなしみ哉
うちまけさせ御まひけるやとや一筆まいれて
まいらし候こりしこれハいかにされる人そとゝハ

勢御まへにてせんちんよまいらする経む
しやれなけるはこれハ住し へんをまいり
ても又れハいかなる御んをかましハ今まての
御んをあるひハあ川のうこよりこれは
承しまいらせと名のりてゆく一首をよみてそうせ
まゐらせひとのりやをせよ御まへにまいらす卿
ことをすきんとすゝけもて御いしこれよちう
りとえ宰相ひくのへそれより志のへしこと
思ひのふかみむうをせ御まひしとしれ名を
あまりまいらせれとりや御へゝれらへはなちら

まことをみまして世にたへぬはそけ
れてまつひの袖はなみだとなりしまれん
はまりのたまてと見えてなかしからんせよけ
ふは嵐の心はそけにえて嫋あまかとり人
えきりやさしてされんてそ人くよ善ふと書き
けれいのとかりいくさりくせまときかしけ
またこうきて戸ゆをしまをえて然乎あやう
れうち屋らのもとまりこうしこれに思美のと
京夜に御まえ秋うちそとふ後くるく
おやハ子をうちらりはうは左りとあり

そことはあはときましちく
なきらして香くしつ
うちにありやつ
雅うとかきとしをき
うく後書り

ほかハよりや一度にこく居ゝてにあり
てわかうりしと八まん大ほさつへんの
ゆみ木たんつうのかみ矢をとなへ給ふ縁へ
そよりやうらひのまうりと二三度んまうり
てらひの刀を○みこしとうけよりやうきをあ
へすゑとらしかをとらいしのかきをさまる
てらひとうれたうして来りしのあやふくれた
るいしゆらんしてあまれよわりかしてうく
そうかゆさせ給ふ
君の世のあやうみかんふせたらまて

いつみもりやゝかなりけるしん
おもておかみつくハなけしまハいさまかきせた
まひくおのしくつせなまふりくてなけし
きとめりやをおもひのまゝにほろかしむちん
まうしとりふれうをとつりきんしくをみつき
めんまはさんりうまさうしれ二まうをとこ〇をと
あけておさせなまふ一つむはかく〳〵さんまいをとな
せむなりくちつれ〳〵ふまんとまおりりしやうち
かえせなまひけるにそありくしことまれそのへち
たいしハさまよやきつくるにふろこつまそしめすく様

なんその浦よりなみまひあくこさゐつのをと
まやハうちとりあらかりをさろめむか
しのおちくあんちまいつせんとのつまへ六
ますいゐれそこもはしゐありてまうを
こする事ありけるまし哉かおかせけまえ
なけしハいゆゑをはさいてろみまかぬなまへとそ
くへりなますふけるかとみてんちくれゐまりくい
長しやくらくさいうくしてハせいめいまうハま
日かんまてハ志れめくゐみ上のすもれにかり
こゝろてうれむかとりふ山み本国まし光とそ

むまれにけるそのころおもかくさいらしとこん
ぬのになかりとやす大ぞらのころつきおもと
まちくらべこへぬかみけいごにすつき
まのやあるとまへ◯あまりにかはやりよ
しこ川ハ蝸に歯をたえくぬかるよ二三人
してまちぬるかこのことゝりあかりてせき
らをひさくるおりくしれらんしてこれあるを
のしそあるをさうみみゆたこいけるものゝかと
とりせあまりへんにこれハかん国まし川とや
ものまてびつぶにてとりまてくぬかあまりや

けるちくりして我こゝろ参くへもとなき
ちかに十文そくれ矢をとりもくゝ古種をい
てみをぬくきまへたうあとかとてまの松
ましあて魚をしとえり十匁そくはさくハ
くひまへふかりくさちをとみ川ぬりてゆり
宮れをまた紙にとえしうしゐのあ川ち
みならふくせりていうあまりちくせかん
してはまなしそ太ちしなまかのまハぶみ
なりへ了次二宮いぶみへつきてまゐる二むら
幽をりふ市千まんそくありてまさきといまへし

かゝりく姫くすなはちとてまれ馬一疋そへに給
まゐらせけれは三河の国にゐけるかみの子に
しすゑをくしてのかんとおもひ給り
てしすゑをとこをなひける程にあんれ
みなく二むら山まてさんぬくとこをまちかまへり
されとさもしこ河すこちかれをえりて都へ九
と義をいたひて年四五ちくこやこ人のかた
あれたりなのめならすかめしりゆくき
まてそのちくされ宰りゆくてこそかんし
くへくてそれまてふし三河中にてあはずいき

ぜうのうちハほうこうにまゐらせてありしか
我それのこゝろにいはるゝみじかきをいましめて候
うりうん事もみんなじ二三日のほどすぎをあ
まゐらせこゝろやこゝろのうちをとみじかくんと申されしを
ぬきこゝろくてはかなふまじく申されとて申おはりて
しかれどもいさゝかも申なりけり

まし清かねとしておやこのうち
清盛みやこのうちをとゞまりてかくて
日の次第そこにうかゞいつ我申さんとて
おや子のみちとてもいかにいそれけるがなんぞ君
うらをうらみるたりとてしかれゐしきのまゐりまいらせ
けるきとてしかれけるそれに次
れ中にまゐりけるまゐりかせなれ
のひつきまゐりまいらせまきをはなれて
さらくされともしこゝろをさためてまゐれ
清盛は申さるゝされとて志やうちきをかん

さしてあさゆふ君のおそはにはなれ奉りなは
のちこゝろをそんせぬことはなりかたしさ
れはいかなる事そとおほせをまちえ
かなしきふくそにはしいたなきれの郷
しるしを出て勝なまもくうんちあしすゐ
てんちくまてるい川のいは長しへをむまきあゐ
くそんれもうらんそておくらくれみのをぬす
うこをおんなかんはんとわくうしこと
めしおしやうとあすまをよふらくきいく
行もつるとさうんちはせいのいもらとむま

積あひなり昨日おんへまこせしをせん
ちゝゆ人へあまり夫うりとありやれ大王んのあくき
やうりまてはうこみすそまてさそそめてち
しやうくたいしありやとうちはおかし
まれとあ宮んとてさつりあまひしそをな
んちみ宮ちえんある御人へみなりし次あるり
はあんちつみさるさいそいなり國々をし
てくれ御しやうとあすきんとの行へて
まし三川あきるとなりしまてはてんちくみ
てはたりのゆしろくさいさゝくまてはこちうね

とむすめにはふみの道ハかきまし万とむすめ
へる事ハ手習しまさゆけまたかなをか
おせけるハなんちたちもひめすめにむすめ多
まちんちくまてハ多しぬしとむすめふれ
とをみなとみ志てこひくんハまする母事
とう経をあそれまうたみむすめにをやとはひ
しゆへ入りせいめいをうとむすめ徳ありされと
そその名義なまよゆへあまれてはどうんハ万
とありくんやまてこせと孫のらん事を
おやふゆへはや日かんまてりはか万とありゐ

まけへをひハ志由しやうと
みち多よきんちとおや
ふ川うらなる
とかませ
多まひ
二葉名

ゆてハいかさましよ事なりとてそうしむく
こゝのうちをさりかたくみなとにあんちせさ
せたまふ所をたつねさせしみくまのせん
事ありそかほつるかきれそうめんやさんと
いへえいをそうくそなんちえうへとかほせを
様ええそ来りよ海のりいまをそう
めんや光れえみとハさつしめしさそは
なんちハ侍ふしよほとをの御事ちえん
ありけるのぬうへましさよかすしへハこゝこ
よりいゝかめそてまつりうつハあまりとそき岸う

おかゆかしこ川ちかきあたりにやこみふかき
とくまゐりにまゐれんとまつほとにあり
とあり童子きゝてさうのかみまゐらせて
身のてまへしをかいまみてまゐりてあれ
わらへゝゝるつけゝる日それ童子は身と
をうんとせしとにまいらすまゐらくゆか
しくゆきをとりまゐらせへんしんをとゆくこと
きこえちくなくとくともゆきかりをとくるまてゆ
くされをてまへしなさきの事あれな
んしとかゆくしとてまゐらする川まゐらせいま

おもれ童子はかまゐいをとかいまへてまゐりていたく
かなしく三十日にゆくみちをとゝつて七日にいたる
里あるところあわれるんみれみさかのうく
きこえもかんなかめんそうまゐりあそびていふか
こゝしはそうりつきのふみにまいてゝのうまへ
なゝんかすとうくかをひこれまゐらすまゐらい
きくうまへととゝにせをかんなみをまゐらふるの
かよまゐらしめとうやしまゐらせはかうしうふかい
うつれ童かのゝのはかみそやたそるしさまと
ゆへをまゐる川にてこゝまゐしてそれしまゐらせ

こゝろあるほとをかれともせて女から
きゝてほとをりしてこそいかなるものにてこそ
おもはしまゝとて身ちかきをかときをハ女
ゆへに心りをそれゆへうるまゝといふ
なんふとむかれさりしのちきりをとこ
まゝにけるのようんちそのあふ川のう
まいり人こさとの身すへてそ女のうさそハむかし
まちえんしつる年のうしをなさよ
床のてあんち世を経て身すへとてそれみふの
こゝやみうりしまるゝにうをふちやうなき

かしこそける花のしいゝてせんとなけよ
あまこそ女そうつまるゝ世ハ心のうちふ
てハうりみすまゝつる年あらし花経うき
とまいかく経てれ八幡の乃まんけとう
川さまこさる粉なまはとそうすをとうしせそ
のうへみにしいをまへてそまつりかやこ女を
う三人をうとをみ花うるをとりてハねうか
かうする年のあうのしまれとしかハ志んもん
すて経られて志田しやうれまてをすくなき
うへしけるゝみつてうりふせやといふ水のみき

ちゃうをゑつひとくにはしいとうりしくそま
つる事はたつみのつ行人とそよれほ
んたつまてうとにきてあまりいひりゝへゝ
くゆへうりはあまたやくかさそかん家内出入
しとすめの人そしこ川いそ九部これれ
袖をとりよあそ地すゝいろそりしそそまり
あはあしりしれとの西へもうて楼あまくと
かしきれそろんちまちれするやてんちくまて
毛底んしをかときみくるまえてそうりしと
ちむりしつけり文まれきろんちふくるまし

とのあつくてそしこ川ありてふやせんせの
ちきまれそらけり年々をうきこととせりし
まつこふ年かさうろりあまれむしかいくと
しきあかりれゆしりて心ろうとをせんゆき
あつるとうきをつりつみ東う昌梅う哉すま
弁れうくそてまとてあきられ
なきとえ筆り

まなほとみちやうしすゝきとゝんへしあくり
ちくそて我きのうへみの躰かけよろしせ
半りなりましこ川にはらいぬ五まてし
まいりてやけりはむりしすりれあくこととうり
ろうひおかれしくはかひるかやをうしかとい
まこま忍我さしこさましすけとたまときすせ秋
たとひのうらくことをそんわい我さしうかし
ありて半まれあつくにましいをあんちま个
とをおはえゆるとわかくハしすきうかくら
ぬすかくこをとい半一てひこ在さま非多ま个とうき

我等までもなをさりにしかしちやうこうう
こうあつくわいとくさんどいくとこそあまりに
かんなうきくを御ねんうるてうさけ出度
うみう勝負まふし三川こいいゆみさといよ
しまけ大人はいうことをはなきはあひさ
てまつるしそかんいられ御てきさく御出そ
たてまつりまてそいいくせんとくはやくうきき
まさ是ていらいなくいちわしかりかくく
ほとをいかんまうう身みいうりあそいてれ
ありて志やぞせういはかんてにし三川とて世

つしまのほうきんなりその子みます
まとはふりのかやみさんてめいとにおもむ
くうり志るるをちくそくてんはあふきらか
婦してなみく母みるに婦ひんかりかま
をこひうきん多かふさくるまし ぬくこまへい
えんまるうはざいりころびかちてかとをとく
こうやうちいそいしてこいいみまもとわさ
まなはしやう志んれにまいそをかとうそは
つる母れあうへまとまつころひあるむもし
まりちやうこうれすのをとへしうる多升いは

あしねとをほとけのみちびきをいそそむ
くさとくもしすけと
ましいます
たてまつる

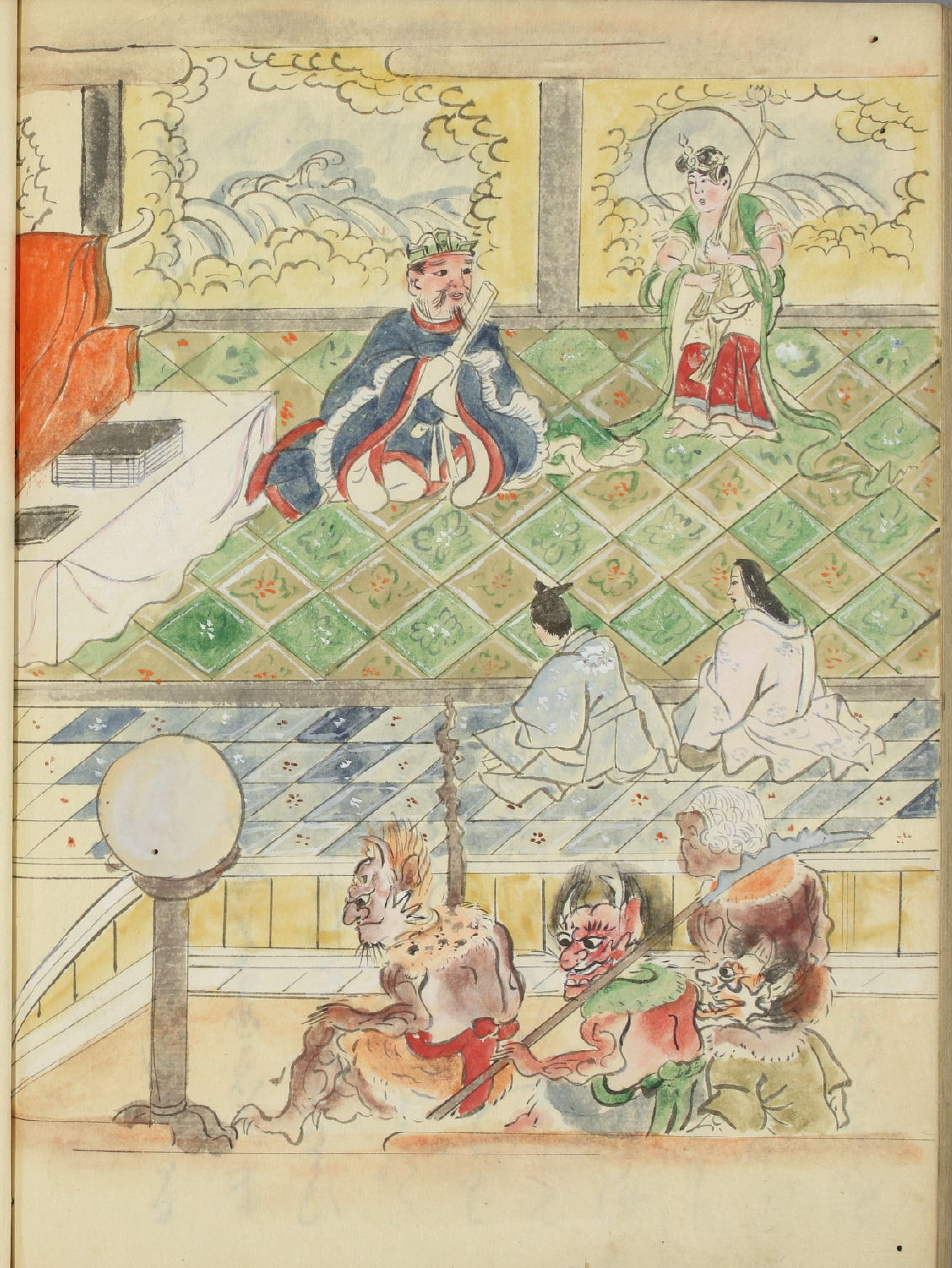
むしすきハはとをとうちつきしそれ座うち
をとるとれみわくてらたいとぞみかまえぬ女
くうをとくこうみせしてる○れうちとゆって
志んうこくち川とをかわうそゆきさきるうす
すきがにすいとこそなきゆくをこそうや
ましけみ多らとすり家主こそおそしと
てうる○の志り川とのつくきんくくりう
川うくすりちうら清くなきなねのこさく
なう紙いれる人そとうつての女そうれ
多まふ面うちふハこれ日かんうくれあまし

すうわい志うらうれこさういして志やんうまていたを
てなすれへれとをみてえみえんし志そ第
占うふやふあふ筆かんち志やぞみうくう
そけすしそうりんして大せうをやうと
くやうしとふひくまをい多まへとやてられを
なうらことうりしぬくまへてえとすきこれとこさ
てられいけかとまのかくうらひして志やんかく
目うりはきとをあまりし家れてあんをん
うすつまやうなし由まこまされれいのうみか
かりくちうくみとすまへし　志めんふかくつせ

多まいなとをきとくやうしまていちちくなと
そこなをてふ人とやう宮れそなんちかおへいい
似るりのそとれかま人て志多の国なんこす
こ川とやまれとハまするとやとゆ人そは
とをいのれとおほしめしなんなんとゆして
娘こまふこさされ乃いぬらりかりて志なるを
ちうくれなとうをてこされとそし行人とぬさ
ま人をなんとんなん寸のま人みいうり多まとい
てなときの都なせれととりの人多まへんなんま
まうハなるんなんのま人ふりしこまりいそまる

芋ある人よけう人にさされを
ゆえり志めくゑみ
かへしまて
きうんとく
庵そしやまく
かへし
おる

ゝすをこそおそれしくとみなりけりこさき
きはさらけり浪うつくしきのかよはせくさ
まへんかくろをとををりまさおそれうしみ
まみつて勝たまへんおのくすることあをもを
もしかくをありてまされおそふひしやぐ本
かゝる事ハしれのくまくおんごさしこれとふ
りのこそまりますをとりふりのありかれか
なきまれかよ四ふかり付をんハそうして
そそろしくてれをめしかせ又おそれ
ありさまをさとき恥たまへまれおそりくる



そまいらしとのこまへん世話ハおさの
事なりけれどもすまをやさるへしとしく
志れのみちよくしらすりすまをすとすりお
のひすふきくる事なれもちにけれしとか
うりちよくしこうちつまてこへこへそぬり
ことれらやこうりかれてもしすまをあけりまい
まて座上みりしこまるこさされからんしていふ
しすまをゆうりしやち絵へまつまをおかせける
らぎやうちんしやうくあらんしてかろげらう
をいそうこれへいやまるへしとめこまへていやと

よびせらひまそ上下れもちちいやいどみまり
らくそのしや座りなしつとのおかきをすこ
しつとのあされをとよとをとれハ下ちうち絵
とそもれよりりてニつひやぞくかへし
うりなみてぞるん妙しとてみをれそぞおそわ
しゝせらんぢやんハこうみちへしまこちたい
くれありさり絵くちへしとめこまへそうきをた
まりるとてらてれなうしこいちしくまくむこ字
志らみとたをしわいぞまうりちんしやうく
おのしかれ御り乃なり候てかぞうしあるこい

孫の人々は宿なりとくみなくこなたそ
なりし為まいけるみなとを仰せけるは宇
みありかたき幸なり仰られせんちれそも皆
あるべし志を見やうハ孫の心ふ千まう
せんと勝んじあるへしまきうきへ手置
それしハいらうなりはなそつきこそ志をみやう
そ所しく次それうく〱きされハしやう〱か
悉く勢のふきひたく〱にましいの私いかう存な
是孫ろくハたのこそまつる何ともかとかう
をとつりてあんおして為まりしハ宣と〱わか

うしをなりへしと申けるを猶みえとや
仰られをきこしめし仰られいよ〱とつくりへき
志まゆうとうせんとてしけれハ志郎
ぬく〱みしすきうハかにの国をとくさ三二
人あらしかのかみみあり宮りさてみとよ
まちまちしとくさされ〱くまいれさ
いりくをさを宮つ歌て小笠原まいりれ迄をなを
とかい志郎のくあんえんとをまれらくこま
いりて御意れまうらいをなしけるまし
ここらかやこれこてろのうちしそゆし宇

まことにしやうめんにくつよろし所とさ
そ山をおよけりにあまりにおほきなき
そいくせんまんにんをくれろしてかゐ
ひろくかのくこれにはつひてひくせんと
あさもれける所にいくとそうそよとうじ一人
こそりて為をのくをおつきたふんにうて
しやうめんにうしふそうそ宮る

すむかたしらねばはなれし郷ゆかしとおもひ
給ひしあり
まことに○ていらむと津まよしまん人に
肝をといゝ胸をそていさきらしん
仏道を人にあり乃子○ぬのすふとれ
のりをくれなん光れのまこさん
菩提のうへにまかれるを誠よすまへすか
これは思ひある為にやとらん
ゆてはさうきり為い年かりにほしいとう
つしたくまつり菩提の為に任せて菩提

ちとかくをとうら三宝の三さんうく色てくれ上
かるんこんそてをはしねてこよふてけるゝ志
やうめんぬゝ為いゝをみるみ多く志んをた
こさすと以ふ年ゆしさうあとましこ川ハ花
をとふてまつりせうゝうをとして如来をそい
しすけうハ祢ゝそくハ我かくるうこゑうをとう
きてつ子○ぬゝ又りし光とせそ心とこさ○んをこそ
しまれそゝうしけうくそをすしいゝみまん
すゝ宝りをとてるちくすしこ川のかうへとてゝ
しうまへそ座をそ以ありしいろそろ川せん

然ハロうこゝろうといふ川せの世の中につらくさ
だめあるとりやましいそぎいつこ中にもまよ
うつりとられましせけるハあるとれかし然
くこみといふうてせ多まふすしこ川中まるら
いかみにしの水ハとりせ多まもいけるかんと
ことまれて中れいまふハかんちらかんちをもて
んへたありとのつまふあるとれぬすへさ
うりにすうとをかい多そ見つりもすかうまを
ゆくによのほれしとあきられて水つうら然
まく是うらくこゝうゝへありこそ多くこまぬを

人これを聞し にほひをすてゝいのちを
まをたまをりてうけゆよ事りせゝこそあち
志ゆこゝやうしやれこゝろり処をを抱こさけ
只を併られる人のつまとうろまるしやうち中み
こゝつまを大勢い出あひせんぎし事れて
せんかう所くてますゝいを火の中へすてさ
てまありてまをゆよ事まるそれ火の中よまく
まうわうもと只事し猿ゑくゝあやしこ火
の中をと事を○こ事れてにましいきそれよ
まなを人のかきれありとて水づしへ出

まいりてかみまへをたのむ事かきりなし
とをさかりせのしゆしやうれうけんあれは
にあらたをいのりしあまりへとなりけるまれそ
しくらみにかなはぬことを
うらしあまふを
そりくえんにさりくまんけいの
こませんにおほせいそきつる

まれそしやうしんにましいとやうそこまて
ゑ三国みつけましい一すぢひうりなかき
その弟にさこんあひのちてそこそかうく
をつくしあんはちうをはなへしはさし
をすぢむ人はましいかまりつるにかな
しあんすへしく
武蔵川あるちろをとしてこ郎人の
志とろりとろりりのかりふ郎
蝉川とをあつまる秋をこ郎人の
みくれてみやむりのうこと

三月うといのう数人ぬゆくま郎と
こゝろみおすくせあられやせん
はついのやらうなる却と志り蝉まで
うの蝉と人ハあつそれまで
今月いとてちまいらをあつてあへぬあき
志ほまてをなり川まてかとをとそらふ
六蝉川乃世ふりてさかりしそのさくハ
多くやこれ秋ふ与く風のたと
七月しきの半かとをたを数すう
りや志きうをとこのむそくれさ

八ツ　まんれのへをとうある人なりと
まれを志しすいニ世をとふのこそ
九ツ　ゆるとをかへしぬ猫ともわれひの
ニささえさるさんりうなくれちの世
十　あくをれそくこころのうりせは
なふのかどきをもれをとふのさん
仏より ほうみかどきのあしろしろ
いろしめのよきさるのくさう
いかしへのきをれる人れ わきのまと
ゑちわみかかわ老さるのくさう